

小学校音楽科において「音楽ぎらい」を作らないための教師の課題

—PAC 分析法を援用して—

初等教育コース

41070320 渡山 志織

論文要旨

本研究で言う「音楽ぎらい」とは「音楽は好きだが音楽の授業は嫌い」なことを意味する。「音楽ぎらい」の子どもに対してどのような配慮をすべきかについて検討していくために、今回は PAC 分析法を用いたインタビューデータに基づき、「音楽ぎらい」の要因を考察していく。調査対象は自分のことを「音楽ぎらい」だと考えている大学2年生および大学院生の計4名である。

まず、「音楽ぎらい」の要因として考えられるのが他者からの評価不安である。出来ない自分に直面すること、周りに出来ないと思われることで社会的自己像が低下していくことへの恐れ、出来ないことで周りに迷惑をかけてしまう思いが「音楽ぎらい」を生みだしてしまったと言える。次に学習意欲の低下が挙げられる。学ぶ見通しや応用がきくなどの発展性がもてないこと、達成感・成就感が得られなかったことが学習意欲の低下につながったと考えられる。さらに注目すべきことは、「音楽ぎらい」の人が本当は劣等感を取り除きたいと考えていたことである。つまり、劣等感をもつ人が、心の中では「出来るようになりたい」、「音楽は苦手だけど自分の努力次第では出来るようになるのではないか」と考えていたことが明らかとなった。「音楽ぎらい」の人は強い劣等感から音楽を避けようとする思いと、出来るようになるために何か行動を起こしたいと願う思いの間でアンビバレントな状態にあったと考えられる。

このような「音楽ぎらい」の要因を踏まえて、教師の課題はまず、1時間の授業の中ですべての子どもが活躍できる場を作ることである。「音楽ぎらい」の子どもは強い劣等感をもっていると考えられることから、その劣等感を取り除き「できる」実感をさせることで自信をもてるようにすることが必要である。2つ目は、子どもが今まで出来なかったことを出来るようになったとき、その過程を踏まえて具体的に褒めることである。子どもは具体的に褒められることで自分の価値を認められたと感じ、自信をもつことができる。3つ目は、「避けたいけれどもできるようになりたい」というアンビバレントな状態にある子どもへの対処である。まず、子どもの「できるようになりたい」思いを理解することが大切である。そして、子どものペースに合わせて、根気強く、苦手を克服できるよう手助けしていくのである。

引用・参考文献

1. 大川恵子 (2000)『音楽科授業改善のための教師の課題—「音楽ぎらい」をなくすために—』宮崎大学卒業論文。
2. 内藤哲雄 (2006)『PAC分析実施法入門 改訂版 「個」を科学する新技法への招待』ナカニシヤ出版。
3. 外池武嗣 (2007)「生徒の学習意欲と授業構築に関する考察」『武蔵野短期大学研究紀要』, 第21巻, 113-120 頁。